

研究所だより

編集・発行

千葉県長生地方教育研究所

茂原市東郷2300-1

TEL 0475 (24) 9721・FAX 0475 (23) 4820

H P <http://www.choseikaikan.or.jp/>メール kenkyujo@beach.ocn.ne.jp

「未来からの留学生」 (一宮町の教育を考える)

一宮町教育委員会 教育長 藍野 和郎

◆学校教育・社会教育そして家庭教育

「子どもは未来からの留学生である」という視点から、一人一人の児童生徒の限りない成長を支援していくには、学校教育と社会教育を両輪とした教育が展開されなければなりません。

具体的には、「学力向上」「思いやり」「感謝」「向上心」「意欲」「豊かな心」「健やかな体」「郷土愛」等々を育成するには、学校教育だけでは限界があります。

子どもたちの未来を保障するためには、保護者・地域の方々のご支援をいただきながら、学社融合の考えのもとで、取り組んでいくことと考えます。

◎学校教育に願うこと

- ①学ぶ楽しさを実感させ、「問う心」を育てて欲しい。そのために先生方は「伝わらなければ伝えたことにはならない」という考えのもと、「一人一人の子どもたちに伝わる工夫」をして欲しい。
- ②「わかる」を目指した授業が展開されていることは周知の通りですが、さらに一歩進んで「できた喜びを実感できる」ように指導法の工夫改善をして欲しい。

◎社会教育に願うこと

「優しさや感謝の気持ち」を持ち続ける生徒に育てて欲しい。これは「職場体験学習」・「宿泊学習」・「修学旅行」・「部活動での対外試合」・「各種コンクールや発表会」等々学校の中では体験できない多くの生きた社会体験活動の中から「ありがとつ笑顔と心」を学びとって欲しい。

◎家庭教育に願うこと

保護者の皆さんへのお願いは、飛び越してきた「適時の階段」を登る手助けをして欲しいということです。

「適時の階段にある子どもの願いとは?」、甘えたい・嘘をついたことをあやまりたい・学校であった出来事を早く伝えたい・猛勉強や部活動をしている姿を見て欲しい・以前とは違う自分を見て欲しい・書物や人物に共感したことを聞いて欲しい等々たくさんあると思いますが、気づいた時にお子様と一緒に拾いあげてください。

◆(家庭・学校)での子育て

いよいよ児童生徒や保護者の皆様には希望に満ち溢れた新しい春が近づいてまいります。

親が我が子に注ぐ愛情は計り知れません。先生方は子どもや親の気持ちに寄り添いながら共に歩を進めていかなければなりません。

保護者・大人・親を教師と読み替えてみたり、子育てを学級経営と読み替えると新しい発見があるかもしれません。

私自身が現役時代から心の支えとしていた先人から学ばず教える中からいくつかを紹介します。

①かわいければ、五つ教えて三つほめ、二つ叱って良き子にぞせよ

- ②やってみせ、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば人は動かじ
- ③父は照り、母は涙の露となり、同じ恵みに育つなでしこ

1 子育てと躾

- ①躾はし続け、心育て。
- ②甘やかすと甘えさせるを間違えないで。たくさん甘えさせて。
- ③大人の都合による知識・理屈・合理性を押しつけても、こどもは見抜く力を持っています。

2 豊かな心の育成

- ①心と心のふれあい(スキンシップ)を大切にすること。
- ②喜びを表現する姿、美しさに感動する姿を見せる大人に。
- ③一人一人の子どもを尊敬し、寄り添うことができる大人に。
- ④「やる気」を育てられる大人に。

3 魔法の言葉って

- ①プレッシャーをかけると、子どもは疲れてしまいます。
- ②厳しいルールを押しつけられれば、子どもはルールを破る方法を探します。
- ③好き勝手にさせると、子どもは人の気持ちに鈍感になります。
- ④一人の人間として大切にされれば、子どもは思いやりのある人間になります。
- ⑤親を信頼できる子どもは、本当のことを話してくれます。
- ⑥おおらかな家庭に育てば、子どもは考える力を育みます。
- ⑦先のことを考えて行動できれば、自分のゆくべき道が見えてきます。
- ⑧責任感を育てれば、子どもは自分で考えて行動できるようになります。
- ⑨支えてあげれば、子どもは自分に自信を持つようになります。
- ⑩表現できる場を持たせれば、子どもは本当の自分を出せるようになります。
- ⑪愛してあげれば、子どもは人を愛することを学びます。
- ⑫子どもを信じて見守れば、子どもはより良い世界を目指して歩いていきます。

◆結びに

最後に、地域の方々が継承してきた文化はどれも皆大切なものです。今後とも、「未来からの留学生」を温かい目で見守りながら、限りなく続く希望の未来へ送り届けるために、地域の皆様方からのご支援ご協力をお願いします。



次代へ 受け継がれていく教育

長生教育研究会 会長 狩野 久志

1 はじめに

2020年、東京オリンピック・パラリンピックでは、日本選手が大活躍し、日本全体が応援ムード一色の姿が目に見えてきます。オリンピックムードで様々な消費行動が拡大する【ドリーム効果】から、その経済効果は30兆円規模にもものぼる、とも言われます。しかし、その後の景気の落ち込み、治安の悪化なども心配視されています。いずれにしても、これから先の日本にとって大きな転換期であることは間違いなしです。

教育界にとっても10年に一度の学習指導要領の改訂が行われ、小学校では全面実施となります。3年間の移行期を経て各学校で準備してきたことが、ついに「ヨーイ・ドン」となります。

子どもたちのどんな姿が映ってみえてくるのでしょうか？

2 学校が変わる

今から10年前(2010年)、東上総地区の小中学校数は137校、児童数22,791名、生徒数12,946名でした。わずか10年間で19校が統廃合し、児童生徒数は8,700名減と、驚くべき数字です。教壇に立つ同僚も300名を超える人材が去っていきました。

私が教職に就いた昭和50年代後半、自分たちの時代にこれほどまで「学校が変わる」とは夢にも思いませんでした。

日本各地において高度経済成長期(おおむね1950年代から1970年代)の就職先として、教師の採用枠が急増して、他にやりたい仕事がないから「先生でもやろう」あるいは特別な技能がないから「先生にしかできない」などという「でもしか教師」といった言葉が存在しました。

高度経済成長が終わり、1990年代以降は日本国内の経済の低迷や少子化に伴って、学校の教師の採用枠は激減し、教師の採用試験は競争率の高い狭き門となり、そして今では公立小学校の教員採用試験をめぐって、競争倍率の低下が大きな話題となっています。

令和元年度の教員採用試験で、「小学校教員の競争率が8年連続で減少し過去最低の2.8倍となった」ことが文部科学省の調査で報告されました。

「教員の厳しい労働事情が遅々として改善されないため、望ましい人材が企業などへ流出している可能性が高い」とも言われています。教師としての「質・力量」の向上も含め、人材育成が急務となっています。

3 長生教育研究会としての方向性

昭和26年、学校現場で子どもたちと向き合う教職員の問題意識を共有し、より良い教育活動を求めて第一次県教研活動が開催され、今年は節目の第70次を数えます。

昭和40年代は千葉県教育界では様々な動きを経

て、現在の教育組織が立ち上がりました。長生教育研究会の発足もその一つです。

多くの先輩たちが長生の教育をさらに発展させていこうとした熱い思いがうかがわれます。今日に至るまで、各方面で先輩方や同僚が運営の中心となり、支えてきましたが、組織の運営・活動の見直しが求められています。

(1) 教育研究会の運営について

学校運営の円滑化を図るため、9月に開催されてきた分科会を夏季休業中(8月下旬)に繰り上げ、準備を始めています。しかし課題も多く、各部会の提案者がなかなか決定していないことがあげられます。また、教育講演会については3年ごとの開催とし、できる限り個人の「修養」に努めていただきたいところです。

(2) 各部会の活動の活性化について

特に問題別領域では、関心の度合いや部員数に偏りがあり、なかなか研究が深まっていきません。脈々と受け継がれてきた研究にかける思いや実践が、これから先下火になってしまうのではないかと、そんな不安もあります。

そのため、現在ある28部会を数年間かけて再編していく考えです。活動の下限人数を30名以上とし、下回っている部会にはヒアリングを通して、統廃合を進めていきます。また、部員数の偏りに関しては、各学校からの人数に制限を付け、校務分掌等を考慮して、できるだけバランスのよい配置をお願いしていきます。その他、自主研修として「教育実践研究レポート」講座の開設など、若手のサポート体制を図ります。

4 おわりに

中学校3年生国語科の教科書に、井上ひさし作「握手」が載っています。・・・中学3年から高校卒業まで仙台の天使園という児童養護施設にいた「わたし」が、戦前にカナダから来日して、その園長をしていたルロイ修道士と料理店で久々に会って話す。

昔は痛いほどだったルロイの握手は今では実に穏やかで、二人はなつかしい昔話に花を咲かせる。やがてルロイが仕事がうまく行かないときは、「困難は分割せよ」の言葉を思い出せ、などと言い出し、「この世の暇乞いに回っているのではないか」と感づく。

別れ際に「死ぬのは怖くありませんか」と尋ねると、天国が「あると信じる方がたのしい」、そのために「神様を信じてきた」と言い残し、ルロイ修道士は去って行った。・・・

当時、中学校3年生と「握手」を読み進めながら「最期の別れ」というルロイ修道士の気持ちに迫りきれなかった反省が残ります。改めて読み返してみると、今の自分の心境はまさしくルロイ修道士の姿を投影しているようです。「教職」のゴールまで、残り数日です。



「長生地方教育研究所の取組について」 これまでの50年 そしてこれからの研究所

千葉県長生地方教育研究所 所長 松村 暁雄

千葉県長生地方教育研究所(以下研究所)は、昭和44年に設立され、50年という歴史を重ねてきました。一言で50年と申しましても、設立は現職の教員が教職に就く前であり、多くの者がまだこの世に生を受けていないことでもあります。

この大きな節目の時に、研究所所長を拝命させていただいたことは、この上ない喜びでありました。

その理由の一つは、研究所のこれまでの歩みを振り返る機会をいただいたことです。

過日、各学校や各関係機関に「五十周年記念誌」を配付させていただきました。50年の歩みを、一つの形としてまとめることができ、皆様にお届けできたことをとてもうれしく思っております。是非、手に取ってご一読いただければと思います。

多くの皆様からのお祝いの言葉に続いて、10頁から12頁にかけて「長生地方教育研究所設立運動」を載せさせていただきました。これは、「千葉県教職員組合長生支部『三十年のあゆみ』」より転載させていただいたもので、研究所初代主事、故 宗政行英先生の寄稿によるものです。

それによりますと昭和40年代初め、県内各地には既に教育研究所が設置され、地域の教育課題の解決に成果を上げていたことが記されています。教育研究所を持たない都市が少なくなってきた状況の中で、「長生にも研究所の設立を」との機運が高まる様子が、手に取るように記録されています。人材面も、財政面も、必要な物品も、全てゼロからのスタートであったらうことを考えると、当時携わられた先輩方の並々ならぬ熱意と、関係団体の深い理解があったことをうかがい知ることができます。

現在研究所では、調査部、研修部、情報部の各々が、これらの熱い思いを引き継ぎ活動しています。13頁以降に情報部創設前の教育史部も含め、年度ごとの調査研究内容等を記してあります。皆様方が今後新たな研究を検討する際に、先行研究としても十分参考にさせていただけるものもあることと思います。是非ともご活用ください。

20頁からは、「歴代研究所員写真」を掲載しました。歴代の所長、主事、所員、協力員、関係団体役員の写真です。50枚を数える写真に、改めてその歴史を感じます。諸先輩方の懐かしくも熱意に満ちたお顔と共に、背景に写る教育会館の移り変わりも貴重な記録となっています。

そして71頁からは、今回の記念誌の特別企画として「各学校のあゆみ」を掲載いたしました。全国的な人口減少、児童生徒数の減少に伴う学校再編が進む中、各学校の歴史を記録として掲載させていただきました。大変ご多用の中、各学校のご担当者の皆様には、資料の整理と原稿の執筆にご協力をいただきまして、ありがとうございました。各小中学校2ページのなかに、沿革史や歴代校長名、記録写真等が納められています。在籍児童生徒数は、遡ることができる最も古い記録と、最多児童生徒数を記録した年度、そして現在までを振り返り記載されています。さらに、校旗や校歌の歌詞も掲載することができました。

改めて関係各位に感謝申し上げます。

さて、ここまでは「五十周年記念誌」の紹介と、お礼を含め、これまでのことを振り返ってまいりました。

ここからは、所長を拝命した喜びの、二つ目の理由について触れたいと思います。

研究所の働きは、教育に対する熱い情熱を持った先生方や関係機関の方により支えられ、前進しています。それは、これまでの50年も、そしてこれから先も変わることがないと感じるその瞬間が、大きな喜びをもたらしてくれるのです。

研究所の所員の皆さんは、現代の教育課題を敏感に感じ取り、調査研究を進めることで、各学校の教育活動や先生方の教育実践に資することができるようにと、時間と労力を惜しまず活動に取り組んでいます。今年度、研修部は「研究所だより」151号から153号までの3号を発行しました。調査部は2年間にわたる調査研究「小学校における外国語活動の実施による成果と外国語教科化への課題」を研究紀要第46集にまとめました。情報部は、前述の「五十周年記念誌」発刊に尽力しました。

今後も現場のニーズや、喫緊の課題について、調査研究が進められていくことを想像すると、笑顔があふれます。教育に対する熱い思いを持った先生方が所員として参加していただき、これからの研究所を支え発展させてくださることを楽しみにしています。

また、研究所が企画運営している研修会でも大きな喜びを感じています。

「学校経営研修会」では、これからの長生の教育を学校経営の立場から推進していきたいとの熱意と覚悟が伝わってきます。

「教務主任研修会」では、教育課程の円滑な実施のため最前線で活躍する先生方が一堂に会します。喫緊の課題に対し、力を合わせて解決の方策を模索している姿に、長生教育の明るい未来を感じます。

「教育研修会」では、教員の使命である、常に研究と修養に努めていこうとする姿に、心からのエールを送ります。

「教育は人なり」と申します。どんな時代にあっても、どんな状況にあっても、子どもたちの成長を願い、そのために力を尽くす教師の姿は美しいものです。教師一人一人がその意識を高め、互いに磨き合っていくために、研究所が今できることは何か問い続けていくことが大切であることを、改めて感じさせていただいたことも、大きな喜びの一つです。50年の歴史にただ胡坐をかいているのではなく、常に最新の情報を提供し続け、「教育をする人」の一助になれるよう、これからも、前進してまいりたいと思っております。

先生方をはじめ、関係各位には、今後ともお力添えをいただき、ご指導をいただきますよう改めてお願いいたします。

また、今後取り上げるべき今日の課題等、研究所へのご要望がありましたら、ぜひとも主事にご連絡をいただければ幸いです。

「これからの研究所」が、皆様の熱意と力によりますます発展していくことが、一番の喜びです。

令和元年度千葉県長期研修生 研究報告



社会的事象を多面的・多角的に捉える力を育てる社会科学習の在り方
—地域素材「天然ガス」の教材開発を通して—

茂原市立五郷小学校
教諭 村上 健輔

研究主題について

グローバル化や生産年齢人口の減少などにより今の子どもたちが活躍する時代は社会構造や雇用環境などが大きく変化していくことが予想される。そのような時代の中で、子どもたちには様々な情報を見極め、多面的・多角的に物事を捉える力をもつことが求められている。そこで、4学年「住みよいくらしをつくる」の発展的な学習として地域素材「天然ガス」を教材化することで、社会的事象を多面的・多角的に捉えることができると考え本主題を設定した。

研究目標

社会的事象を多面的・多角的に捉える力の育成のために、地域素材「天然ガス」の教材としての有効性を明らかにする。

授業の概要（第4学年）

（1）映像資料の活用

天然ガスが湧き出る川の様子や火を付けると燃え上がる様子を撮影した動画を視聴し、何が湧き出ているのかを予想するところから学習をスタートした。印象的なシーンに児童は強く興味をもち、学習問題の設定につながった。また、ゲストティーチャー（自家利用の方）が出演したテレビ番組の映像を視聴した。ガス井戸や実際に家庭で利用する様子を事前に見ることで新たな疑問が生まれ、説明もイメージしながら聞くことができた。学習意欲の継続が苦手な児童に対しても有効な手立てとなった。

（2）ゲストティーチャーの活用

自家利用している方、茂原市内のガス会社の方をゲストティーチャーとして招き、それぞれの立場からの話を聞き、質疑応答を行った。自家利用の方からは、約50年前に井戸を掘り、自分たちでパイプラインを通して各家庭で使っていることなど。ガス会社の方からは、天然ガスが地下に眠っている理由や探掘・供給の施設、副産物であるヨウ素についてイラストパネルや実物見本などを使って説明してもらった。事前に映像を視聴していたため、具体的なイメージが生まれ活発な質疑が行われ、茂原の工業の発展や自家利用など新しい視点を得ることにつながった。

研究のまとめ

様々な面をもつ地域素材「天然ガス」の教材化は、その一つ一つの視点を比較・関係付けたり、自分と関連付けたりして考察することに適しており、社会的事象を多面的・多角的に捉える力を育てることに有効であることがわかった。

独立した単元として教育課程の中に位置付けるためには、指導計画の見直しや評価規準の作成などを行っていくことが必要である。



ふるさとのよさを実感しながら郷土の音楽と主体的に関わる児童の育成を目指した指導の在り方
—郷土の芸能を総合的に捉えた教材開発を通して—

白子町立南白亀小学校
教諭 志田 輝美

研究主題について

グローバル化、国際化の進展に伴い、これからの学校教育では、我が国の文化や伝統に対する関心をさらに深め、大切にすることを求められている。そのような背景を受け、本研究では、身近な地域の郷土音楽に視点を置いた教材の開発をすることとした。白子町南日當の獅子舞を、郷土の芸能として総合的に捉え、多面的・多角的に音楽と関わり、さらに鑑賞、音楽づくりと関連させることで、児童が郷土の音楽に愛着をもち、主体的に学習に臨むことができると考え、本主題を設定した。

研究目標

郷土の音楽を郷土の芸能として総合的に捉えた教材開発を通して、郷土の音楽に親しませるための指導法とその有効性を明らかにする。

授業の概要（第5学年）

- （1）「白子町に伝わる獅子舞との出会い」
獅子舞やお囃子を鑑賞したり、演奏や体験を行ったことを通して、児童は、地域に伝わる伝統芸能について知り、親しみをもつことができた。
- （2）「獅子舞のお囃子を詳しく聴き取ろう」
鑑賞を通して、お囃子の音楽的な特徴や面白さなど、様々な視点から音楽づくりへの手がかりを見つけ、共有することができた。
- （3）「南白亀小オリジナル獅子舞をつくろう」
お囃子の音楽的な特徴をもとに、旋律やリズムを工夫して「南白亀小オリジナル獅子舞」のお囃子をつくり、獅子の動きを工夫して取り入れた。
- （4）「獅子舞とお囃子で思いを伝えよう」
音楽づくりから生まれた作品を発表し、互いに交流して、これまでの学習を振り返ることができた。
- （5）教科等横断的な視点をもった学習過程の構成
特別の教科道徳との関連では、ふるさとのよさや伝統を継承していくことの意味について考える学習を行った。総合的な学習の時間との関連では、地域の獅子舞の歴史等についての調べ学習を行った。

研究の結果と考察

教科等横断的な視点をもった学習過程の構成は、児童が郷土の芸能について様々な側面から考え、それらを音楽づくりへの思いにつなげ、主体的に学習することにつながった。また、グループで獅子舞をつくる活動を通して、友達と協働して一つのものをつくりあげる達成感を感じさせることができた。さらに、鑑賞と音楽づくりを関連させることで、児童が思いや意図をもって音楽や動きを生み出す活動につなげることができた。本研究では、5学年の題材として位置づけ、教科等横断的な学習過程を実践したが、他学年での位置づけ、他教科等との関連性など、課題は多く残る。地域性を生かし、各学校で独自のカリキュラムを組み、実践を積み重ねていくことが重要であると考えられる。

令和元年度千葉県長期研修生 研究報告



高学年における「相互理解、寛容」の心を育てる道徳教育プログラム
—あなたとわたし
「ちがうけど同じ」をみつけよう—

茂原市立東郷小学校
教諭 佐藤 範子

研究主題について

グローバル化や変化の激しい現代社会の中で、また学校生活の中で「相互理解、寛容」の心の育成が求められている。その要請に応じ、複数の内容項目や対象者、他教科や体験活動等を取り入れた道徳教育プログラムを構成・実践した。相手の立場に立ち、謙虚な心をもちながら、よりよい判断・行動のできる児童の育成を目指し、本主題を設定した。

研究目標

「相互理解、寛容」の心を育てるための、効果的な道徳教育プログラムを開発、実践することで、その効果を明らかにする。

研究の概要 (第5学年)

- ①内容項目「個性の伸長」
自分自身のよさや成長を感じると共に、他の人と自分の共通点や相違点に気付いたり、再確認したりした。
- ②内容項目「国際理解、国際親善」
学活で外国と日本の文化を学び、共通点や相点がある事を知った。道徳で外国の人と関わるときには、お互いに理解しようという気持ちが大切という思いを深めた。
- ③内容項目「公正・公平」
特別支援学校の児童との、居住地校交流を視野に入れて活動を進めた。学活で特別支援学校の学校生活の様子について知り、道徳で障害がある方と「公平」について考えた。その後、交流会に向けて、どのような活動を一緒に行いたい自分たちで考え、当日は共に楽しんだ。
- ④内容項目「親切、思いやり」
高齢者体験を行い、高齢者についての理解を深めた。道徳で「本当の親切」とはどのようなものが、考えたり判断したりした。
- ⑤内容項目「友情、信頼」
友情を育むためには、相手を思う気持ちや信じる気持ちが大切であることを再確認し、よりよい友情を育もうとする思いを高めた。
- ⑥プログラムの振り返り
活動を振り返り、理解し合うことや尊重し合うこと、相手の立場になる事の大切さを確認した。

結果と考察

「相互理解、寛容」やそれに関連する内容項目の理解を深めることができた。また、道徳科と実生活を結びつけて考えようとする意識が高まった。

学びを、より広く、深いものにするためには、家庭との連携も視野に入れる必要がある。



適切な行動を増やし、問題行動を減少させる支援について

—A B C分析の考え方を取り入れたリーフレットの作成・活用を通して—

茂原市立西小学校
教諭 鈴木あやか

研究主題について

発達障害等の特別な教育的支援を必要とする児童が、生き生きと学校生活を送り、自身の能力や可能性を最大限に伸ばし、自立・社会参加していくことは重要な課題である。その基礎・基盤として、問題となる行動を減らし、学習する力を向上させ、安定した学校生活の実現が求められている。そこで、A B C分析の考えを取り入れ、問題となる行動の要因を把握し、その背景や原因への理解が進むことで、適切な行動を増やすためのより具体的な支援が可能になると考え、本主題を設定した。

研究目標

発達障害等の特別な教育的支援を必要とする児童に対して、問題となる行動に置き換わる適切な行動を増やし、問題行動を減少させる支援の方法を明らかにする。

研究の実際

- (1) A B C分析の理解を促すリーフレットの作成
A B C分析の考え方を分かりやすく伝えるためのリーフレットを作成し、所属校にて配布し活用してもらった。
- (2) 事例研究
(ア) 対象児童5名に対し、標的行動(問題となる行動)の出現頻度の測定(ベースライン)
(イ) 行動分析・支援デザインシートを用いた行動の分析と支援の検討
(ウ) 支援介入後の標的行動出現頻度の測定と有効性の考察
- (3) リーフレットの活用と効果
リーフレット活用後、行動の見方の変化や教師の意識の変容が見られ、本リーフレットの活用性や有用性が示唆されたと考えられる。

総合考察

通常の学級担任でも理解しやすい簡便なリーフレットを作成したことで、A B C分析の考え方が深まり、行動の捉え方や支援の考え方など、教員側の意識の変容が見られた。その上で、A B C分析を用い、行動の理由を考えた個に応じた支援の検討と支援ができ、児童の適切な行動の増加と問題行動の減少につながった。今後、通常の学級の大人数の中でも無理なく活用していくためには、学級の全児童に対して同時に支援を行うクラスワイドな支援を考えていく必要もある。

A B C分析(応用行動分析)は、支援を検討するための1つの方法として、とても有効である。今後、通常の学校でも認知が進み、教員が児童の適切な行動を引き出す指導や支援を行うための一助になればと考える。

各種研修を終えて



初任者研修を終えて

一宮町立一宮中学校
教諭 岩名地 優

初任者としての勤務が1年経とうとしています。何もわからず校長先生をはじめ多くの先生方に助けて頂きながら、ひとつひとつ乗り越えてくることができました。この1年間多くのことを学ぶことができたと思います。

校外研修では、専門的な講師の先生方や現職の先生方の講話を聞き、教育現場で使える実践的な知識を身に付けることができました。また同じ初任者の先生方と生徒指導や教科指導など、各校での実践を発表し合いました。日々の教育実践で苦労していること、悩んでいることを気兼ねなく話すことができ自分の励みになりました。これからも同期の先生方と切磋琢磨しながら、学び続けていきたいです。

また異校種体験では、高等学校を1日体験させていただきました。そこで、中学校と高等学校との違いを感じました。高等学校は専門的な知識を学ぶ場であるので、中学校の進路指導では高等学校でどのようなことを学び、その学習が将来にどのようにつながっていくのかを明確に指導をしていかなければならないと強く感じました。

校内研修では、初任者指導教員の田邊仁子先生のご指導のもと多くのことを学ぶことができました。保健体育の授業は生徒の動きから用具の管理まで細かく把握し安全を第一に考えて授業を行うことが大切だということを知ることができました。また運動が苦手な生徒に対してもたくさん励まし、少しでも自信をもたせ運動を好きになってもらうことが保健体育教師として大切なことだということを知ることができました。田邊先生のような温かく優しく生徒に接することのできる教師を目指していきたいです。また保健体育の授業で意識したことは挨拶や返事、話を聞く姿勢、移動は駆け足などの規律指導です。教頭先生から「学校の集団行動は体育教師次第だよ」と言われ、授業以外の学校生活に活きるように指導を心掛けました。まだまだ指導不足だとこの1年間を通して感じたので、来年度以降も学校の集団行動向上に努めていきます。

この1年間、3学年の副担任として担任の先生のサポート、生徒の心のケアに努めてきました。3学年の担任の先生方の様々な指導を近くで見ることができとても勉強になりました。生徒1人1人に寄り添い、生徒のためを思って時には励まし、時には厳しくすることが生徒の成長、自立につながっていくことを感じました。担任をこれからもたせて頂いたら生徒のことを常に第一に考え、生徒と正面から向き合うことのできる担任を目指していきます。これからの長い教員生活、うれしいことや辛いことなど色々だと思いますが、この教職という素晴らしい職業に就くことができた喜び、やりがいを強く感じる事ができた初任者としての1年目を思い出し、日々自己研鑽に努めていきます。



5年経験者研修を終えて

長柄町立日吉小学校
教諭 久我 亜由美

今年度育児休暇から復帰し、5年経験者研修に参加させていただきました。本研修は、まだまだ力不足で、さらに育児休暇でブランクのある私にとって、貴重な研修になりました。

校外研修では、「主体的・対話的で、深い学びを通じた児童の育成」、「特別な配慮を必要とする児童への指導」、「一人一人を大切にする集団づくり」、「健康で安全な生活を実践する能力と態度の育成」、「中学校への接続を意識したキャリア教育」などの内容について、講師の先生方にご指導いただきました。「特別な配慮を必要とする児童への指導」では、「困った子」ではなく、「困っている子」であり、子どもの違いを知り、それを受け入れ、寄り添う支援が大切であると学びました。また、通常学級にいる特別に支援が必要な児童に対しての環境づくりや教師のかかわり方など、具体的に教えていただき、とても参考になりました。

また、能動的自立研修ツールを活用した研修もとても役に立ちました。能動的自立研修を受けることで、客観的に自分を見つめ直すことができ、改めて気付くことが多かったです。教員として足りていない資質・能力に気付くことができ、今後取り組むべき課題に向き合うことができました。

課題発表会では、自己の課題を研究テーマに、実践してきたことをグループで発表・協議しました。研修生によって課題は違いましたが、実際に取り組んできたことなので、参考になるものばかりでした。また、指導主事の先生にアドバイスもいただき、貴重な時間になりました。

今回の研修では、現在の自分を振り返ることができ、さらにこれまでの教育実践を整理するととても貴重な研修となりました。校内でも、若手同士で指導案検討を行ったり、意見交換をしたりして、これからは若手のリーダーとして、後輩の支援をしながら、周りをよく見て仕事をしていかなければならないと実感しました。これかも自分自身の指導力向上を図る研修に取り組み、力量を伸ばし、一層信頼される教員として成長していきたいと思っています。

各種研修を終えて



スクールリーダー研修1年目を終えて

睦沢町立睦沢中学校
教諭 仲野 江美

初任研, 5年研, 10年研, 新特担研, これまで研修のたびに新しい気づきや, ヒントをいただきました。特に昨年は初めて特別支援学級の担任となり, 学びの多い年でした。生徒と一緒にゆっくり, ゆっくりと, 小さな課題をクリアしていく日々を通し, 一人一人の目線に立ち, どうしたら取り組みやすくなるか, やる気にさせることができるかを考え, それに必要な手立てを工夫することの大切さを改めて実感しました。

今年度, 自閉・情緒学級の担任となり, 知的学級とはちがった指導の難しさに直面し, どうしたらいいか悩んでいた頃, リーダー研修の連絡をいただきました。目の前の生徒のことで精一杯の自分にとっては, 不安な気持ちが大きかったです。しかし, 研修がスタートすると, 講師の先生方の熱のこもった講義に身の引きしめる思いがしました。自分の知識や経験不足を痛感し, ついていくのがやっとの部分もありましたが, これまでとはちがった角度から学校や授業について考えたことによる新たな気づきや学びも多くありました。

例えば, 綱紀肅正に関する講義の中で, なぜ不祥事はなくならないのか? と考えたことです。不祥事根絶に向け, すべきことについて考えるだけでなく, 視点を変え, なぜなくならないのだろう? と考えてみた時, 教師の多忙化やストレス, 職員間の人間関係の大切さがはつきりと見えてきたような気がしたのです。また, 不祥事が起きた場合を想定し, 保護者会での説明や, 予想される質問について考えたことも初めての経験であり, 教員としての責務の重大さや, 全職員での共通理解と組織的対応の大切さを強く思いました。授業研究では, 道徳について研修しました。ねらいとする道徳的価値観を生徒たちが自分事として考えることができるよう, 地域の祭りやイベント, さらに町のPR動画を取り上げるなど, 様々な工夫が行われていたことに驚きました。また, 授業後の協議会でアンケートを生かした授業づくりや, 話し合いのかたちなど, 参加者全員で意見交換をすることができたことも大変勉強になりました。そして, 研修を通して毎回何かを学ぶたびに自分の甘さに気づき, 今の取り組みを振り返るチャンスをいただけること。これも私にとって, とても大切なことです。

閉講式で宮内所長から伺った博物館の話が心に強く残っています。「これからは生き抜いていくために重要なのは, 変化に対応できる力であるということ」この言葉を心に留め, 研修を続けていきたいです。



教務主任研修会を終えて

長生村立高根小学校
教諭 杉崎 峰子

今年度も, 全5回にわたる教務主任研修会に参加させていただきました。本年度の教務主任研修会は, 講話中心の「全体研修会」と, 小・中学校別や中学校区別による「部会別研修」にて研修を進めました。

全体研修の講話では, 「東上総地区の教育的課題・学校訪問の充実に向けて」「次世代を担う教務主任の役割」など, 新学習指導要領実施に係る対応や「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践について, 学校を活性化するための教務主任の役割など, 教育計画の立案その他の教務に関する事項にあたる私たちにとって, 今, 最も重要な課題について学ぶことができました。その中でも特に印象深かったのは, 「フットワークが軽い・教育課程に強い・人を育てる」という, 教職員の世代層の変化から求められる教務主任の役割です。これからの学校は, 全職員が一步前に出ることのできる横型の組織であることの必要性を新たに認識するとともに, 自校の教務主任としてさらに何ができるかを振り返ることができ, とても有意義な研修となりました。

小・中学校別, 中学校区別による研修では, 教科別の新学習指導要領移行準備, プログラミング教育, キャリア・パスポート, 4観点から3観点となる学習評価など, 来年度の新学習指導要領の全面実施に向けて, 私たち教務主任が, 具体的にどのようなことを計画して進めていく必要があるかという, 緊急性のある内容が話題となりました。各校からのお互いの情報交換により, 実践上の課題が明確になり, 自校の取り組みの改善につながりました。また, 中学校区内で3小1中の連携についても話し合うことができました。さらに, 本年度は, 本研修にて全教務主任で協働し, 新学習指導要領による来年度の年間指導計画を作成しました。各学校でこれらを活用し, カリキュラム・マネジメントの充実を図っていきたいです。

本年度の教務主任研修に参加し, 改めて, 先を見通し, 学校全体が円滑に機能するよう, 連絡・調整をし, 必要に応じて指導・助言して支えるという教務主任の役割の大切さを自覚することができました。本研修で学んだことを生かして, 学校現場のために力を発揮できるよう努力を惜みず, これからも研鑽していきたいと思っております。

最後になりましたが, 本年度の教務主任研修会にてご指導いただきました講師の先生方や関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

教育功労表彰

○文部科学大臣優秀教職員表彰

〈体育、保健給食指導 の部〉

茂原市立萩原小学校 教諭 段木 宏太

〈生徒指導、進路指導 の部〉

長生村立一松小学校 教諭 長野 季子

○文部科学大臣表彰

〈学校保健及び学校安全表彰〉

長生村立長生中学校 養護教諭 深山 結花

○千葉県学校体育功労者表彰

茂原市立東部小学校 校長 石井 一好

○千葉県メディアコンクール「優秀賞(千葉日報社賞)」受賞

長生郡市広域市町村圏組合教育委員会
視聴覚教材センター教材開発委員会

○長生地区市町村教育委員会連絡協議会表彰

茂原市立豊田小学校 校長 鈴木 栄治

茂原市立中の島小学校 校長 近藤 宏明

茂原市立本納小学校 校長 深山 秀樹

茂原市立東部小学校 校長 石井 一好

睦沢町立睦沢中学校 校長 岡本 久也

白子町立南白亀小学校 校長 前橋 純一

長南町立長南中学校 校長 野口 智美

○茂原市教育功労者表彰

茂原市立東郷小学校 校長 古山 幹夫

茂原市立豊田小学校 校長 鈴木 栄治

茂原市立西小学校 校長 狩野 久志

茂原市立萩原小学校 校長 宮本 昌典

茂原市立中の島小学校 校長 近藤 宏明

茂原市立本納小学校 校長 深山 秀樹

茂原市立東部小学校 校長 石井 一好

茂原市立茂原小学校 教諭 清水 和美

茂原市立西小学校 教諭 高山 昌美

茂原市立西小学校 教諭 酒井 操

茂原市立五郷小学校 養護教諭 廣田 紀子

茂原市立鶴枝小学校 教諭 菅野 和規

茂原市立鶴枝小学校 教諭 小倉 佐枝子

茂原市立萩原小学校 教諭 石井 準子

茂原市立中の島小学校 教諭 白井 順子

茂原市立新治小学校 養護教諭 深山 かおり

茂原市立東部小学校 養護教諭 亀田 佳恵

茂原市立東部小学校 教諭 中村 桂子

茂原市立緑ヶ丘小学校 教諭 金坂 真理子

茂原市立東中学校 教諭 江澤 京子

○一宮町教育委員会教育功労者表彰

一宮町立東浪見小学校 教頭 前川 裕幸

○睦沢町教育委員会教育功労者表彰

睦沢町立睦沢中学校 校長 岡本 久也

睦沢町立睦沢小学校 教諭 原 由美子

○白子町教育委員会教育功労者表彰

白子町立白潟小学校 教諭 佐瀬 恵子

白子町立白潟小学校 教諭 矢部 茂美

白子町立白潟小学校 事務長 齊藤 由喜子

白子町立関小学校 教諭 中山 祐子

白子町立関小学校 教諭 高山 きよみ

白子町立白子中学校 教諭 若菜 延代

○長柄町教育委員会教育功労者表彰

長柄町立日吉小学校 教頭 藍郷 久義

掲載順につきましては、順不同とさせていただきます。
(敬称略)